

文・中野香織

エッセイスト 服飾史家

電車で化粧をすることが、日本では根強くマナー違反とされている。なぜいけないのか？『デイオール』のサイエンティフィック コミュニケーション ディレクターであるエンドール・M・ジャービス氏に聞いてみました。

「動く電車のなかでメイクするなんて、日本女性は器用だねえ。危険だからダメなんじゃないですか？ フランスの女性は車が赤信号で停止したときにメイクしていますよ。」

ウィットの効いた答えで笑わせてから、「目の前の人に、自分は尊重されていないと感じさせた時点で失礼な行為をしていることにはなりますよね」と納得の説明。

それにしても、そもそも、なぜ仕事に行くのにメイクアップをしなくてはならないのでしょうか？ 今度は神経科学のエキスパート、アルノー・オーベル博士が答えてくれます。「社会の決まりというわけではありません。話しかけやすく、話を聞きたいと思わせる魅力をメイクアップで演出するためです。そんな〈社会性のある魅力〉を備えれば、自分にとって仕事しやすい状況をつくることができるでしょう？」

メイクもまたコミュニケーションの手段。メイクをすることで、顔以外の、人間関係にまで変化をもたらされるのです。「社会性のある魅力。そのような視点で考えると、見る人の心に与える印象まで考えたメイク（と振る舞い）をするのが、〈社会派美人〉ということになりますね。美容情報と新製品が過剰にあふれ、〈SNSのエゴ美人〉が増えている時代だからこそ、実社会とコミュニケーションすることができ、知性、人の心に与える〈印象美〉を考へることができ、想像力が求められるのです。古代ギリシア時代から、哲学者や文学者が繰り返し唱えてきた「美しさは、見る人の目に宿る (Beauty is in the eyes of the beholder)」という真理は、今なお有効です。

〈印象美〉という視点に立つてみると、アンチエイジングに対する見方も変わります。たとえば、若々しく見せるために

大人美容の金字塔

『デイオール プレステージ』の美意識に迫る

年齢を重ねるごとに薄れる清潔感を再び！

美容の本質

「印象美」を極める

人に「印象美」を与えるために必要なことは何か…。

エッセイストであり服飾史家中野香織さんが『デイオール』の研究に関わるエキスパートに話を聞き分析。さらに「印象美」を極める肌の「発光力」に着目した『デイオール』スキンケアの最高峰「プレステージ ホワイトコレクション」による次なる美の行方を読み解きます。

撮影／戸田嘉昭(パルドライバー) レイアウト／金田デザイン
構成／荒川千佳子、五十嵐孝子(本誌)



シワをなくしたいと願う人は少なくありませんが、ジャービス氏はこのように断言します。「シワを教本なくせば若く見えるのかというと、まったくそうではありません。印象として、どう若々しく見せるかを追求する方が効果的です」。

では、どのような肌がそう見えるのでしょうか？

「若々しく見える肌とは、なめらかで均質な肌です。そのような肌の表面は光を反射するのです。年齢を重ねることによって、光が反射しにくくなりますが、最新テクノロジーを駆使したスキンケアによって、肌表面を整え、光を反射させることができます。さらに肌の内部にまで光を巡らせ、発光力を高めることさえ可能です」。明るさと上質な艶をたたえた、光を発する印象を与える肌。これこそ「デイオール」の最新テクノロジーが追求する肌にはかならない、と氏は示唆します。アンチエイジングといえば、おのずと興味をかきたてられるのが、フランス女性の生涯現役ぶりです。なぜ、彼女たちは80歳、いや90歳になってもセクシーであり続けられるのでしょうか？ オーベル博士がすばり答えてくれました。

「女性の年齢の印象を決める要素は、声、におい、姿勢、そして言動（アティチュード）です。本人が、自分の年齢を決めるのです。もう年だから、と自分で思い、そのような言動をとることで、周囲がそんな風に扱うようになります。自分の印象年齢を決めるのは自分。フランスの女性は、何歳になっても、セクシーであることを自分自身に許しています。だから周囲もそのように扱うのですよ」。

美しさの印象は、他人の目と心の中に生じます。でも、その印象をどのように操るのは、あくまでも自分次第なのです。社会性のある印象美のために必要なのは、振る舞いが相手の心象、ひいては自分に対する態度まで左右するという自覚と想像力、そしてエゴを離れたサービスピース精神でしょうか。最先端のスキンケアのひとつ手間を加え、印象派の絵のように光を放つ存在でありたいものです。

見る人の目と心に宿り、
光り輝く存在

印象美

目指すべきは、エゴ美人ではなく光を放つ印象派美人

Kaori Nakano

なかの・かおり / 「ファッションとは人の時代を形づくるもの」という定義のもと、過去2000年の男女のファッション史から最新モードまで、研究、執筆、講義を行っている。2008年より明治大学国際日本学部特任教授。著書に「紳士の名品50」(小学館)、「モードとエロスと資本」(集英社新書)ほか多数。

www.kaori-nakano.com